

# 第五回UMAP大会に出席して

小樽商科大学商学部教授 ◆ 船津秀樹

## 一 背景

本年（一九九六年）八月二〇日から二三日まで、ニュージーランドのオークランド大学において開催された第五回UMAP大会に、小樽商科大学の山田家正学長、国際交流センター長の永原和夫教授、そして、国際交流担当の小松事務官とともに参加してきました。今回は、四年前に小樽商科大学が初めて学生交換協定を締結したニュージーランドのオタゴ大学との協定の更新の時期になっていたので、学長のオタゴ大学訪問と合わせる形で、UMAP大会に参加しました。大会全体の出席者が六五名程度でしたから、小樽商科大学のような小さな大学から四名も参加しましたので、不思議に思われましたが、我々にとつては、オタゴ大学との交流が交換留学生交流の原点であり、ごく自然にこの参加を設定しました。

大会に出席する直前には、オーストラリア

のシドニー郊外にあるウーロンゴン大学を訪問し、サットン総長をはじめとする大学関係者と親しくお話することができました。ウーロンゴン大学とは三年前から学生交換協定に基づく短期留学生交流を進めており、今後、小樽商科大学で行うべき短期交換留学生制度推進のための特別プログラムについて意見を交換してきました。ウーロンゴン大学との交流は、一橋大学の山澤逸平教授の奨めで始まったもので、マッキンノン前総長が直接に小樽にいらして学生交換協定に署名されました。山澤教授、マッキンノン前総長ともに、UMAP発足当初からの強力な推進者であり、今回の総会中にお会いした関係者の中には、お二人の功績を讃える声がありました。

## 二 UMAPニュージーランド会議

UMAPは、一九九一年にオーストラリア学長会議がアジア諸国に呼びかけて始まったもので、第一回会議がキャンベラで開催され

た後、一九九二年ソウル会議、九三年台北会議を経て、九四年に大阪で第四回会議が開催されました。今回のニュージーランド会議から、総会は二年に一回の開催となりました。今回の総会の開催にあたっては、昨年、ニュージーランドのリンカーン大学でワーキング・グループ会合がもたれ、UMAPの将来ビジョンと戦略的な計画が四ページの草稿にまとめられていました。

UMAPの目的は、アジア太平洋地域における学生や大学の教職員の交流を促進することであり、学生交換を促進するために、単位認定のガイドラインの設定、単位互換手続きを円滑にし、学生利益保護のためのモデル契約を確立する、さらには、学生交換に関する年次報告の作成などが具体的な役割として期待されています。二〇〇〇年までの五年間の戦略的計画としては、アジア太平洋地域における双方の大学間交流協定を拡大すること、政府や多国籍企業の支援を受けるために、U

M A P の理念を多くの人たちに理解してもらい、支援してもらうための広報活動を行うこと、短期プログラムにインターンシップを含むような可能性についての検討などがもりこまれていました。さらに、このような計画の実施にあたっては、メンバー国の出資金に基づく恒常的な事務局を設置する必要があることが、提案されてきました。

小樽商科大学でも、四年前から、学生交換協定に基づく一年間の短期交換留学を推進してきました。現在、アジア太平洋地域の六大学と学生交換を行っています。交流が進むにつれて、事務量も増えてきました。また、交流相手先でも、日本の他の大学と新しい協定を結ぶ場合があり、日本語能力のある教少ない学生をめぐって、競合する場合も始まっています。この点では、我々としては、U M A P が多国間、多大学間の交流を円滑に進める仲介者の役割を果たしてくれるのではないかと期待から、この会議に参加しました。

### III プロジェクト

プログラムの初日は、ホストのオークランド大学総長カーソン教授の歓迎スピーチで始まりました。その後、ニュージーランドにおいて、大学の国際交流を支援しているアジア



▲オークランド大学総長カーソン教授の歓迎スピーチ

二〇〇〇財団 (Asia 2000 Foundation) のギブソン氏から、ニュージーランド政府による支援体制について説明がありました。氏は外交官で、ニュージーランドにとって、アジア太平洋諸国との大学交流がいかに大切かを力説されていました。その後、作業部会 (Working Group) が総会の議論のためにまとめた将来ビジョンと戦略計画の草案について説明がありました。初めて総会に参加する出席者も多く基本的なところから論点の整理が行われました。

昼食の後、午後のプログラムでは、イギリスのケント大学のライリー氏から、ヨーロッパにおけるソクラテス・エラスムス計画についての説明がありました。ヨーロッパの経済統合を進める過程で、域内の学生達を、他国の大学に短期留学させ、単位の互換を可能にすることによって、共同体としての意識を高めるとともに、大学間の相互交流によって科学技術の進展に寄与しようというものです。U M A P も、アジア太平洋地域において、同様の大学間交流を実現しようというもので、ヨーロッパの先進事例を学ぶことは意義がありました。質疑応答の中で、議論になった点で、筆者にとって興味深かったのは、ヨーロッパとアジア太平洋地域では、地理的な距離が大きく異なるという点でした。たしかに、ヨーロッパの大学の場合には、国境を越えるといっても、列車で移動できる距離ですから、交換留学に要する費用は相対的に低いといえます。これに対して、アジア太平洋地域の移動には航空機が不可欠ですから、どうしても費用は高くなります。この点では、U M A P の理念実現のためには、奨学金の充実が、きわめて重要なことが改めて認識させられました。

また、ヨーロッパでも、プログラムを立ち

上げる当初は、各大学にあった既存のプログラムが吸収されたり、予算がつかなくなったりで、抵抗があつたそうです。プログラムが実施され、各国の大学にとつても、運営面でのメリットが実際に感じられるようになって、理解が進んだそうです。これは、今後、UMAPが具体的に制度化されるにつれて過渡的に発生してくる問題と考えられます。

その後、ロシアン協会のブラッドレー・スミス氏から、インターネットのホームページを利用したUMAPのサンプル・プログラムのデモンストレーションがありました。また、単位互換や交換留学生数の差を調整する機関としてのUMAPの役割についての提言がありました。インターネットの利用は、各国において確実に進んでおり、筆者自身も、五年前から、国際交流では、電子メールを多用してきています。交流する大学の数が増えてくると、従来のように、二大間で交換学生の数を一定期間に一致させるやり方は、非効率になってきます。特に、提携先の外国大学が日本の他の大学との交流を増加させると、日本国内での調整問題も発生します。したがって、どこかで情報を集約して、随時、交換プログラムについて情報提供するセンターが必要になってくるでしょう。その意味では、

現在進行中のコンピューターによる情報ネットワークの構築は、UMAPのような組織には必要不可欠なものと考えられます。総会出席者の間では、この点での議論は、あまり深まりませんでした。効果的に、多大学間交流を多国間の枠組みの中で実施するのであれば、情報ネットワークの問題を、今後研究していく必要があると感じました。

この後、各国からのカントリー・レポートがあり、留学生交流の状況が説明されました。二日目の午前中のセッションでは、各国からのカントリー・レポートに続いて、早稲田大学の西川潤教授から、日本の私立大学における短期交換留学プログラムの経験について紹介があり、その後の質疑応答で、日本の国立大学においても一年間の短期交換留学促進のための特別プログラムが設けられつつあることが説明されました。このようなプログラムの実施にあたっては、英語を用いることが単位互換を容易にするためには必要であるものの、受入国の言語も、同時に用いることが必要であろうとの声がありました。筆者も、この点では、日本への受入れを考えた場合、学生の日本語能力に合わせて、英語と日本語の講義を組み合わせる形で、大学が独自のプログラムを開発していくのが良いのではないか

との印象を持ちました。

オークランド大学の地熱研究所における留学生向けプログラムの紹介があつた後、午後からは、作業部会から提案されたビジョンと戦略計画について議論をしました。この中で、UMAP事務局を設置することが重要な案件として議論されました。これまで、各国持ち回りで行われていたUMAPの運営事務を担当する小規模な事務局を設けようというものでした。日本の代表から、文部省の協力を得て、国立大学の一つに設置したいという提案がなされ、これに対しては種々議論があつたものの、翌日の正式な総会の場で承認されました。団長を務められた井村裕夫京都大学総長から、一月の国立大学協会総会に諮った上で、具体的に、どの大学に、どのような規模の事務局を設置するかが決定されるとの発言がありました。タイの代表からは、日本に国際事務局を置く他にタイとオーストラリアに地域事務局を置いてはどうかとの提案がありました。ホストのニュージーランド大学協会からは、ホストのニュージーランド大学協会の協力を得て日本の国立大学の一つに付置されることになりました。

三日目の正式総会では、次回の総会を一九

九八年にタイのバンコクで開催することが決まり、参加の呼びかけがありました。

#### 四 report

ニュージーランド総会の参加者は、予想していたより少ないものでした。総会出席直前に訪問したオーストラリアでは、大学予算の削減に抗議したストライキが行われていましたし、国会でもデモをする人たちと警官隊の衝突で人が出るさわざでした。そうした中でも、UMAP予算だけは何とか残り、オーストラリアの代表は、ほっとしていました。おそらく、本来であれば、UMAPの提唱者であったオーストラリアに事務局は行く可能性もあつたのですが、現在の状況では、困難だつたようです。日本の場合、戦後五〇周年を契機として勅日本国際教育協会に設けられた短期留学推進制度による奨学金に対する各国の評判は、すこぶる良いものですし、このような分野での国際貢献は、進んで手をあげるべきものだと思います。今後の課題は、UMAPのビジョンを実現するために、国公立を問わず、短期交換留学生の受入れのために、日本の大学がどれだけ教育プログラムを充実できるかにかかっていると云えます。留学生の受入れは、大学における教育内

容を充実させ、見直す良い契機になりますし、日本の学生達にも、とても良い刺激になります。その意味では、UMAPニュージーランド総会は、日本に事務局設置が決まり日本が今後イニシアチブを取る重要な会議になったと思います。

二日目の夕食会で、日本からの訪問団の团长をされた井村京都大学総長のスピーチは、日本における海外留学を遣唐使の時代にさかのぼって説明するもので大変感銘深いものでした。作業部会で困難な調整に当たられた一橋大学の水岡不二雄教授や九州大学の前学生部長として短期留学プログラムをいち早く実施された西村重雄教授から、色々なお話を聞かせていただき、国際交流の場ですが、国内の大学交流の場としてもUMAPは有益だと感じました。

初日のセッションの議長を務めたオタゴ大学のアン・トロツタ教授の専門は日本の歴史です。特に日本の戦後史を研究されています。筆者がロンドン大学に在外研修中に知り合いになり、彼女が東京大学に滞在中の四年前に、小樽商科大学の国際交流週間に講師として来ていただきました。ニュージーランドは、一〇〇年以上前に、世界で初めて女性が参政権を得た国で、その事について講演していただ

きました。オタゴ大学との交流は、小樽市とオタゴ大学のあるダニデン市が姉妹都市であることから始まりました。交換留学生は、それぞれの街の市民との交流も深めています。オタゴ大学とは、協定を改定して、今後も交流を継続していくことになりました。オタゴ大学では、以前はなかった日本語の授業も始まっています。

今回の旅で、小樽から同行した小松事務官は、一歳の時に、南太平洋のガダルカナルでお父さんを亡くしたことを知りました。戦後生まれの筆者にとつては、改めて、平和の大切さを考えさせられる八月の旅でした。戦後五〇周年を契機として創設された平和友好交流計画の意味をかみしめつつ、短期交換留学を通じて、将来の国際社会を担う学生達が若いうちに、多様な社会や異なる伝統を持つ人々に対して寛容な心を育むことができるように、多くの機会を用意してあげたいと思います。太平洋の南北で始まった小さな交流の輪を、さらにアジア太平洋地域に大きく広げていかなくはと、あらためて実感したニュージーランドでのUMAP会議でした。